

新年明けましておめでとうございます。

職員の皆様方におかれましては、令和7年という輝かしい年をご家族揃ってご壮健にてお迎えになられたことと心からお慶び申し上げます。

昨年は、それぞれの職務において町政進展、また住民福祉の増進の上にお力添えをいただきありがとうございました。

さて、昨年を振り返ると、1月1日、元日早々から能登半島地震が発生しました。災害関連死を含めて500名を超える犠牲者が出ました。いまだ復興は半ばであり一日も早い復興を願うものです。

現在、子ども支援課の仲野主幹が、全国町村会からの職員派遣要請により1月1日から2月28日まで石川県穴水町で、仮設住宅入居中の要支援者の訪問、特定健康診断等の支援業務に当たっています。

三芳町といたしましても引き続きの支援活動を行ってまいります。

そして、何よりも今年一年が、災害のない平穏な一年になりますことを願うところであります。

また、昨年は新型コロナウイルスの感染症法上の分類が「5類」に引き下げられ、1年が経ち社会経済活動も活発となり、町事業も新規事業も含め活気を取り戻し、怒濤の如くあっという間に1年が過ぎ去ったように感じました。

「一陰一陽これを道」という言葉がありますが、コロナ禍の陰の時から、陽の時へと時が変化し、明るい日差しが差し込み希望に満ちた未来が広がってきました。

この時の変化に合わせるかのように、三芳町ではここ数年、多くの成果が生まれています。

武蔵野落ち葉堆肥農法の世界業遺産、みよし野里山探訪ガーデンツーリズムの認

定、関越自動車道三芳 PA スマート IC フル化供用開始、第 6 次総合計画、フォレストシティ構想、教育政策ムーブプランの策定、Well-being のまちづくり宣言、東京大学等との連携協定等による共創のまちづくりのスタート、ユニセフ子どもにやさしいまちづくり候補自治体認定等、三芳町は着実に前進、発展を続けています。

そして、今年、11 月 3 日、三芳町は昭和45年に町制を施行してから 55 周年の節目を迎えます。今日の三芳町の発展は、三芳町を思い粉骨砕身町政進展の上に、また住民の皆さまの福祉の増進、Well-being の実現のためにご尽力いただいた先人をはじめ職員、住民、関係者の皆さまのお陰であると感謝の念に堪えません。

周年は、節目の年です。竹は、雪が積もって半球に曲がって今にも折れそうにも見えても、雪が解けるにしたがって元に戻ります。折れません。折れないのは節があるからです。また、植物は節から新しい芽を出します。新しい芽から花が咲き、結実します。

今年、デフリンピックをはじめ数々の施策や事業が実施されます。そして 55 周年の節目の年です。三芳町という竹が、どのような苦難や障害にも打ち克ち、強固に成長発展するためには、55 周年の節目の年を様々な施策や事業を、職員をはじめ住民の皆さんと心をつなぐ取り組み成果を上げ、絆を強くすることだと考えます。

そして、藤久保地域拠点施設の工事が、昨年12月から始まりました。また、関越自動車道三芳 PA スマート IC フル化に伴い地域活性化発信交流拠点の基本計画がここで策定されます。

これからの 5 年、10 年で三芳町は大きく変わり発展変貌する予感を感じます。

ある小説の一節が思いおこされます。

『このながい物語は、その日本史上類のない幸福な楽道家たちの物語である。(中略)最終的にはこのつまり百姓国家がもったこっけいなほどに楽天的な連中が、ヨーロッパにおけるもっともふるい大国の一つと対決し、どのようにふるまったかということを書こうとおもっている。楽道家たちは、そのような時代人としての体質で、前のみを見つめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朵の白い雲がかがやいているとすれば、そのみを見つめて坂をのぼってゆくであろう。』

司馬遼太郎の『坂の上の雲』の一節です。

文章の中の「百姓国家がもったこっけいなほどに楽天的な連中」は、まさに小さな農業の町である三芳を、また360年前に武蔵野地域を鍬一本で開拓した先人達、その志を継承している私たちの姿と重なります。

また、「ヨーロッパにおけるもっともふるい大国の一つと対決し、どのようにふるまったのか」は、地球市民意識の高揚とグローバル人材の育成を町の主要施策として、オリンピック、パラリンピック、デフリンピックと、世界の中でホストタウンとして国際交流をすすめる三芳町がどうあるべきかを考えさせてくれます。

明治の時代と今日では、時代は大きく移り変わり、世相や価値観も当時とは比較にもなりません。しかし、未来を見つめ、その夢や希望に向かって歩いていく人の姿は永遠に変わらないように思えます。

世界農業遺産に象徴される三芳町の歴史、文化、伝統、産業。さらにそれらを礎に一自治体として、人類の環境問題など課題解決に向けての使命を果たし、今後藤久保地域拠点施設、地域活性化発信交流拠点事業をはじめ、様々な施策を進めていく彼方に、三芳町の未来に一朵の白い雲が輝いているように見えます。

坂の上の青い天に輝く一朵の白い雲を、前のみを見つめてのぼっていく。私たちも

三芳町の新しい時代を切り開き、未来を創造するべく、強い信念と明確なビジョンと志をもって歩いていく時だと考えます。

そして、職員の皆さまには、職務を遂行する上で、また家庭においてもそれぞれの人生において、お互いに相手のことを思いやり、尊重し合い、支え合って日々を送っていただきたいと思います。

このことは、広報みよし1月号でも「四海兄弟」と題してふれています。

最後に紹介したいと思います。

昨年9月、あいサポート運動10周年記念事業を実施し、三芳町聴覚障害者の会の高波会長の紹介で、姉妹都市ペタリング・ジャヤ市在住、ろう者でバティックアーティストのリム・アヌア氏が来日し、記念講演と作品展示を行いました。

リム氏は、生まれつき耳が聞こえず、10歳の時にろう学校で友人が描いた龍と鳳凰の絵を見て感動し、アートへの情熱に火が付いたそうです。

その作品には、マレーシアの豊かな自然、建造物、植物や人物画などが色彩豊かに描かれ、独自のスタイルが見られます。中でも目を惹くのは、家族がお互いに抱き合っている肖像画です。

お互いに思いやり支えあっている姿に深い愛が感じられます。その絵を見ると、なぜか心が満たされ、いつの間にか幸せになっている自分に気づかされます。お互いに思いやり支えあう心が、様々な困難や試練をも克服し幸せへと導いてくれます。その姿そのものが何物にも代え難い幸せなのだと。この心が友人に、地域に、世界に広がるのが誰一人取り残さない共生社会の実現に導いてくれるのだという啓示を与えてくれます。

古典、「論語」の中でも次のようなことが記されています。

「司馬牛、憂えて曰く、人は皆兄弟有り。我独りなし。子夏曰く、商之を聞く、死生命有り、富貴天に在り。君子は敬(つつし)みて失うこと無く、人と與(まじ)わるに恭しくして礼あらば、四海の内、皆兄弟なり。君子何ぞ兄弟無きを患えんや。』『論語』

訳)司馬牛が浮かぬ顔をして子夏に尋ねた。「人々には兄弟があるのに私だけにはない。」

実は、司馬牛には兄がいましたが、孔子を殺す計画を企てたりし、司馬牛は肩身の狭い思いをしていました。それに対して、子夏は答えた。「私は『死生や富貴はすべて天命だ』と聞いている。君子は身を敬しんで、人の道に違ふことなく、人と交わるに恭しくして礼に叶うようにすれば、世界中の人は皆兄弟である。どうして兄弟がないことを気に痛むことがあろうか。」

孔子は、人が社会で生きていく中で「礼」を最も大切にしました。

『論語』の最後にも

「礼を知らざれば、以って立つこと無きなり」～礼を知らなければ世に立つことができない、と」言っています。

そして、「礼」で最も大事なことは「恕」～我が心の如く相手を思う～ことです。

リム・アヌア氏のアートと先人の教えから、私もまだまだ未熟で、道なかばではありますが、先人たちの後ろ姿を追い続け、「礼」と「恕」の心をもって歩んでいこうと決意を新たにしました。

新しい1年がスタートいたしました。

まずは、職場の皆さまがお互いに支えあい、思いやりの心であふれた「四海兄弟」、一つの兄弟、家族のような職場環境になってほしいと思います。

そして今年、デフリンピックが東京で開催されます。そのお互いに思いやる心が世界に広がり、共生社会がさらに推進することを願っています。また、職員の皆さま方には職務を遂行する上で様々な課題や困難があるかもしれませんが、住民の皆さまの Well-being の実現の上に、それぞれの使命を果たしてください。

これから寒さも一段と厳しくなります。健康管理には十分ご留意いただき、職員とご家族が共に健康で、充実した一年を過ごされることを心から願ひまして年頭のあいさつといたします。